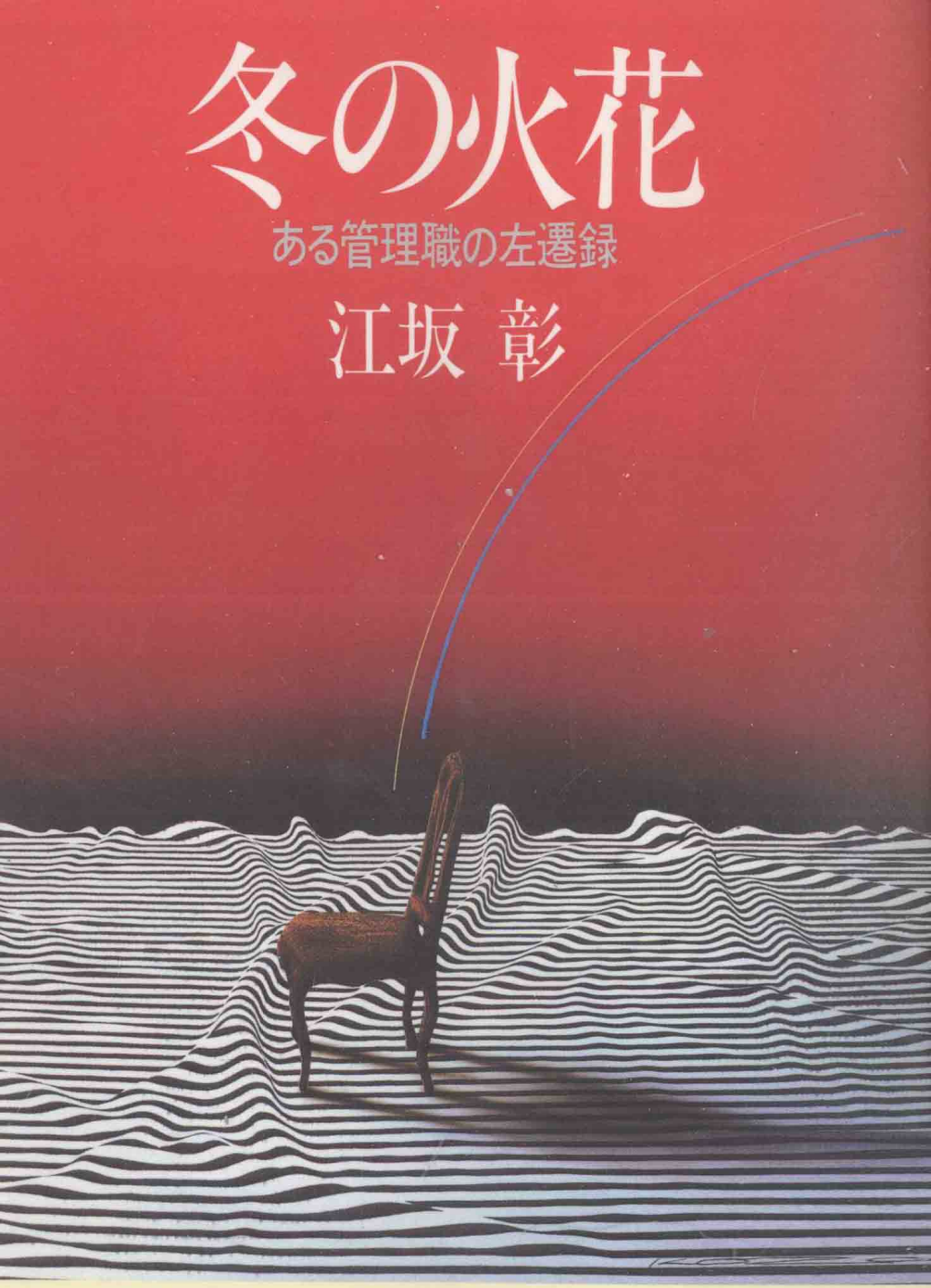
冬の火花

ある管理職の左遷録

江坂 彰



文藝春秋

冬の火花

ある管理職の左遷録

江坂 彰

文藝春秋

著者紹介

えさか　あきら　1936年京都生れ。京都大学文学部卒業。現在、ある大手広告代理店の幹部社員。

冬の火花　ある管理職の左遷録

1983年10月25日　第1刷

著　者　江坂　彰

発行者　半藤一利

発行所　株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23
電話　東京03(265)1211(代)

定　価　980円

印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　矢嶋製本株式会社

©Akira Esaka 1983　　Printed in Japan
万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

冬の火花　目次

はじめに 7

左遷まで

突然の政権交代 *December 1* 12
この異様な混沌 *December 7* 33
成功と失敗 *December 11* 45
孤立への道程 *December 12* 59
いよいよ左遷 *December 15* 78

空白の日々

黙して語らず、流れに抗わず *December 16～22* 94
一期一会 *December 24～29* 111

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

博多にて

都落ちの悲哀　*January 6～13*　130
男の闘いとは　*January 15～20*　149
わが心の応援団　*January 21～31*　169
春遅し　*February 3～15*　182
風激しくして勁草を知る　*February 19～27*　204
心の嵐も通り過ぎて　*March 2～9*　220
めぐりくる春　*March 11～15*　228
日記の余白に――　238
あとがき　242

装画　三尾　公三
AD　坂田　政則

冬の火花

ある管理職の左遷録

はじめに

日本の会社とその中に生きるサラリーマンのことを、経済大国風ではなく、うら側から書いてみたいと、考えたことがある。

考えたことがあるだけで、実際に書くとなると、これは容易なことではない。周知のように日本の会社は一種の共同体のようなものであり、論理よりもむしろ情緒ですべてが動いている。この情緒が少しは理解できるようになるには、自分が共同体の一員として参加し、しかもある程度の歳月を必要とするが、そうなると今度は、万事にさしさわりとしがらみのようなものが生まれ、遠慮が生じる。遠慮だけではなく、自分も又そういう共同体思考しか出来ない人間になりきってしまっている。

それだけではない。サラリーマンは会社の話や生き方などについては出来るだけ黙っているのが利口な生き方であるという思いが自分にはある。

ところが近時自分の身に思いがけない変化がおこり、左遷という憂き目に会った。何様でもない、すれっからしの管理職のよくある話だと言ってしまえばそれまでだが、それを契機にともか

く、わたしの心の中に、何か騒ぐものが生まれた。会社の存在が自分の心にじかにつき刺さり、サラリーマンであることの自分を、もう一度考え直す気になった。会社と自分の関係を一皮剝いて直視し、これまで曖昧にしておいた影の部分や空白のところを、この際ハッキリさせてみようと思った。

気張っていえば、自分なりに会社がわかり、サラリーマンの有様がわかってきたということである。サラリーマンをひと言でいえば、人事というもの、つまり自分の運命が自分でないものによって左右される存在につきる。いろんな人がいろんなことをいうが、しょせんサラリーマンはそういうものであるにすぎないという気がしている。

人事の流れというこの危い偶然のなかで浮沈する自分の存在と、去来する思いを、日記風に書いてみようと思った。

もちろんこの日記は事実そのものではない。といってもややこしいいい方だが、まんざらフィクションでもない。べつに逃げを打っているわけではなく、万事にさしさわりのあるサラリーマンが会社と自分をぎりぎりのところでとらえようとすれば、フィクションとノンフィクションの間隙をとらえるしかないと思っているからである。このわずかの間隙に真実がある。巷間のノンフィクションのこの種の本は、自分の心が傷つかない他人様の話か、あるいはためにする告白、告発のたぐいが多すぎる。またフィクションには――経済小説全盛の時代ではあるが――いうまでもなく事実の重みに欠けている。

といっても、自分が真実をとらえるという自信は一向にないが、左遷という憂き目に会った管

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

理職の心に去来するものには、何かの話題性もあるだろうと思って、ようやく書いてみる気になった。

なおこの日記をありのままに受けとめていただいても、あるいは全くの絵空事ととっていただいても、どちらでも結構であるが、わたし以外の登場人物や活躍の場は、一応仮りの姿ということにしておきたい。そのことだけをあらかじめことわっておきたい。

左遷まで

突然の〝政権交代〟

昭和五十六年の十二月一日。火曜――

今日から日記をつけていこうかと思った。

はじめての経験である。なんとなく気恥かしい気持があって、これまで日記をつけたことがない。べつに気が変ったわけではないが、四十の半ばをすぎようというとき、裸の自分を見つめたくなってきた。もっともこれは、裸の自分に立ち向っていくという威勢のよい話ではなく、否応なく自分を直視せざるをえない事態に追いこまれてしまったからではあるが。

十月末の取締役会で突然社長の交替がおこなわれた。日頃何かとわたしに目をかけてくれていた社長が相談役に退き、かわって副社長が代表取締役社長に就任した。これまでも社長と副社長の間で根強い確執があり、それが交替の際に爆発したという。

突然の政権交替をめぐって社内が、そうぞうしい。人事のうわさ話でもちきりである。本社から観測気球が飛んでくる。

今回のトップ交替で一番動揺しているのは自分だ。〈ああ、おれもついにサラリーマンになってしまったなあ〉とつくづく思う。

もっとも東京の本社にくらべれば、大阪はなんといっても人事情報の面では僻地である。当り

ハズレも多い。支社の大半の社員は、大阪は本社、各支社のなかで最高の業績をあげ、勢いがあるので、おそらく支社長交替はありえないと見ている。「支社長は、社長にも副社長にも受けがよかったから、これでますますご安泰……」とわざわざ言いにくる連中もいる。

理屈からいえば多分そのとおりであろう。だが人間は感情に左右される。かならずしも理屈どおりに動くとはかぎらない。人事には不条理や偶然がつきものである。社長にも副社長にも受けが良くてというぐあいには、とてもいかない。人の心はわからないものである。どちらにも受けがよい、好意をもたれているというのは幻想にすぎない。

感情のみならず、お互い立場もちがえば、思惑もちがってくる。げんに今度のトップ交替は、七十を過ぎてもますます元気で頑固で、いつまでもトップの座をゆずろうとしない老社長に業を煮やした副社長が、ついに大株主に手をのばし、政治家とも組んで、半ば力ずくで退陣に追いこんだのである。

いずれこういう事態がくると覚悟していなかったといえば、うそになる。どちらにも距離をおいてほどほどに接する、という方法もあったかも知れない。遅かれ早かれ副社長の時代が来るのだから、そちらの方により深い接近を図り忠誠を誓うべきだったかも知れない。たしかに理屈の上ではその通りである。それがわかっていながら、わたしはこの厄介な問題を、日頃なるべく考えないことにしてきた。めんどうな手続きや気の遠くなるような忍耐が要求されるこまかい人間関係の配慮などを、つい先へ先へと延ばし、とうとう今日の事態をまねいてしまっている。

たぶん今月の中旬には新体制が発表になるだろう。相当刺激的な人事になるはずである。新社

長は、経営者が本当にパワーを発揮するのは人事権の独占によってであることを、知りすぎるほど知っているはずである。

左遷

単身赴任

このふたつの言葉が肩に重くのしかかってくる。平穏な日常に裂け目があらわれてきた。淋しさがこみあげてくる。

他人の思惑と都合で自分の人生が左右されることがくやしい。くやしくても、今さら何もできない。何もできないことに耐えていることは一層くやしい。今からでもけっしておそくはない、しかるべき筋を通して社長に手を打っておこうか、側近グループを懐柔してみようかなどとあさましいことまで考えてみたりする。だが結局思うだけで、そういうことをやらないであろうということは自分が一番知っている。今さらそういうことをやっても五十歩、百歩であり寝覚めの悪い想いが残るだけである。

この会社に入って十数年、その間ずっと上昇気流に乗ってきた。たまには失速することもあると思う以外にない。

とうとう自分も人生の峠に立たされてしまった。人生の峠、運命の岐路——おおげさな、何をあわてふためいているのかという気がしないでもない。わたしは人生の峠とか運命の岐路とかいう思いつめたような言葉は、あまり好きではない。肩をいからせ、カッと前方ばかりにらみつけている人間だけにはなりたくないと思っていた。仕事に対しても、人生に対しても、そういう思

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com